

## 育児サークルの事例から子育て支援を考える

— D. W. ウィニコットの理論をてがかりに —

大豆生田千夏（ほづみクリニック）

### 1) はじめに

行政の行なう子育て支援が盛んななかで、育児サークルというのは親自身の自主的な活動でありながら、子育て支援の機能を有しているものとして認められている。親自身の自主的な活動であるからこそ、他の子育て支援のはたせない役割も担えるという利点も持っている。子育て支援が必要になり、盛んに実現されてきた背景については触れる迄もないと思うが、現在非常に盛んになってきたこの活動の個々の内容は、「親」をどういふものとするか、「支援」をどういふものとするかによって随分と異なったものになると思われる。多くの子育て支援は「親」を支援される存在、助けられる存在と捉え、その「支援」は指導型に偏りがちである。

本発表は筆者が発足したある育児サークルの活動を通し子育て支援について考えるものである。

### 2) 活動の経過

#### (1) 発足時

筆者には「お母さんそれぞれにもっと育児について語ってほしい」「お母さん同士に仲良くなってほしい」という思いがあった（養育者を母親に限るわけではないが、サークルの会員は母親だけであった）。そのため場の提供を第一目的とし、自由におしゃべりし、自由に子どもを遊ばせるサークルをめざした。

#### <育児について語ってほしい>

親は「教えられるだけの存在」ではないだろう。彼女たちの声に耳をすますことによって、いろんなことが教えてもらえるはず。

語ってもらうことによって、語ったことが関心を持ってきかれるという体験をすることによって、あなたのやっていることは話す価値のない、とるにたらないこと、日常の雑事ではないというメッセージになる。

色々な人の話が生きたモデルとなり、子ども時代に子育ての生きたモデルと接する機会の少なかった現在の母親世代に、理想的な正しい母親イメージだけではなく多様な母親イメージを与えてくれる。

#### <お母さんどうしに仲良くなってほしい>

大きな環境の変化のなかで、孤立しているかもしれないお母さんのうち一人でも、仲間との出会いによって育児を楽しめるようになればという思いがあった。

所属する場のなさ、生活の変化などは大きなストレスをもたらす。小さな出会いは大きな予防精神医学的意味がある。

#### <支援について>

児童精神医学者のD. W. ウィニコットは、援助によって援助される側の力を奪ってはならないとしている。支援する側になるとき、支援される側に何らかのものを与えることができると思いがちであるが、子育て支援において、支援する者＝子育てに有能、支援される者＝子育てに無能という式が成り立ってしまえば、母親は育児を楽しむことはできない。専門家がすべての面において優れているのなら、その母親がその子を育てる意味がない。伝達される育児の知識とは別のところに、個々の、パーソナルな母子関係の場があることは乳幼児研究で認められている。そのような場を個々の母親に生き生きと語ってもらうことができたなら、それは子育て支援であると同時に専門家にとってもその話から学ぶところが多いと思われる。

#### (2) 活動

1995年8月 発足。初回から29組の参加、すぐに57組の会員に増える。

1996年2月 有志による運営グループ発足。

月1回の活動（公園や体育館）

特別活動（プール、シャドーボックス、リース、あんふぁん—子どもの教育について考える会）

1997年3月 月2回の活動 全員当番制

#### <その結果として>

母達は生き生きして元気。ただ、集団としての凝集性が高くなるにつれ、無意識に他を排除する性格がでてきたように思われる。親しいもの同士が集まって仲良くしていることは、一人でいるお母さんに疎外感を与えることもある。自分たちが楽しくなればなるほど新しいメンバーやグループ外の人への配慮は欠け、そしてそのことに全く自覚がないように思われた。

あんふぁんに関しては、子どもが1才をすぎた辺りから、母親間で教育情報が話題になることが増え、不確かな情報が急速に広まったりと、関心の高さを感じたので1996年10月より月1回計4回、幼児教育関係者を招き会を開いた。「発達」「幼稚園」「しつけ」などアンケートをして関心の高かったものをテ

マとした。「本で読むのとは異なり、非常にわかりやすかった」など好評であった。しかし育児には正解はない、講師が答えをいうのではなく皆で話し合う会にしよう>ということに重点をおいたつもりだったが、「結局どこの幼稚園に行くのがいちばんいいの」「どうやってしつけるのがいいの」といった結論や方法だけを教えてほしいという質問も根強く、お母さんは教えてもらいたがっている存在であることを強く感じた。

### 3) 事例

1997年11月28日(金) Aちゃんの家

K, R, Y, S, O, H, A (1995年2~6月生)

午前は公共の場でBの母に刺繍を教えてもらう会

(KとYの母は子ども担当で参加) 午後Aの家に移動。

K君に対し他の子ども達が「ペー」とあかんペーをして追いかけて回す。Kの母以外は居間でサークルのクリスマス会の相談をしていたためきづかず、Yの母が気が付いたときはKの母は和室の隅でKを膝に抱き泣いていた。Yの母がYに「お友達にそんなことをしたらだめ。Yちゃんが皆にあかんべされたらどうかな?」という、Yも他の子も静かになる。Kの母はその後何事もなかったかのようにすごそうとするが、Kがおもらしをしてしまい、そのあと帰宅。

その後、そのことが話題になる。

A母 「全く何もきづかなかった。Kくんは早めに帰るとははじめから言っていたので、それで帰ったんだと思った」

H母 「子ども達があかんペーってしたから泣いちゃったの?」ちょっと合点がいかないよう

R母 「K母にずっと子どもをみさせちゃって、しかもこんなことになっちゃって」

S母 「失敗しちゃった」

会話のなかで、最近K母に子ども達をみてもらう比重が多かったこと、イベントが続く母達の注意が子どもにむいていなかったことなどが反省されたが、Kの母が泣いたことに関しては「K母って考えすぎちゃうのかな」「K母、感受性強いから」などの意見があった。

「2歳半にならない子が、5、6人の子どもに囲まれ「ペー」と言われたことはどんなに恐いことだったろう。K母は後に「私自身が恐かった」と言っている。そして、大切に育ててきた子どもがそのような扱いを受け、どんなに傷ついただろう。しかしY母以外の母はそのことを強く感じていない。むしろK母との関係の修復に関心が強く、悪いことをしたが泣くほど悪いことをしたとも思えないというのが正直なところに思

えた。]

### 事例2

12月1日(月) Rくんの家、B、M、S、O、C  
Mがおもちゃを独り占めする。Sの持っていた籠を奪い、Cの車をもぎ取りRの乗っていた車にRを押し退け乗る。S母がMに「Mちゃんそれはダメ!」と言う。  
[S母も他の母もこれまでは、人の子を注意することとはほとんどなかった。そのS母がMを注意したことに筆者はとても驚いた。Kくんのことがあった日にいたS母とR母は、いつもどおりのM母やC母とこの日明らかに違い、子どもの動き、特に争いに非常に敏感であった。]

### 4) 考察

筆者は自らのサークル活動を通し、子育て支援とは「子育て不安を解消すること」ではなく「子育て不安を持ち続けることを支える」ことではないかと思うようになった(支援とはその人のものである荷物を持ち続けられるよう支えること)。ウィニコットは「(母親は)赤ん坊をかかえているという責任にいと簡単に押し潰され、そのためきわめて安易に規則や原則に頼りがち」になると述べている。母親たちは赤ん坊を抱えているという不安から外の世界に正解を求める。そして自分の納得いく答えをみつけ、安心して子どもをみつめなくなる。しかし「この子はなぜ泣いているのだろう」「なぜ怒っているのだろう」と不安な気持ちでじっと子どもを見つめる目に、その子を見つめていない専門家がかなうだろうか(親とは専門家がかなわない一面を持った存在)。教えられる体験が多いと母親は子どもや自分よりも外の情報に左右されやすくなる。あんふあんでも自分や子どものなかではなく本の中等に答はあると母達は思っているようであった。サークルの中で母達が楽しく元気になり、他への配慮に欠けるように思えたのも、母達が一人でドキドキして不安だったときのことを忘れてしまったためではないだろうか。事例1の起きた背景には、その子の個性には関係なく「強い子、いじめられない子にしたい」という母達の思いが強く、けんかや取り合いの中で子どもは育つという外からの教えが徹底し、元気なら細かく注意はしないという雰囲気があった。しかし事例1をきっかけに母達は子どものことで深く話し合ったり行動を変化させている。それは指導からではなく、母達を学びの共同体として信頼することから生まれたのである。